

ヴェトナム紀行

末 永 國 紀

はじめに

二〇〇九年二月二五日、関西国際空港発のヴェトナム航空九四一便で初めてのヴェトナム（Vietnam、漢名は越南）への旅に出かけた。一週間をかけて、ヴェトナムにおける古今の日本人の経済活動を調査することが目的であった。以下は、ホイアン（Hoi An）に残る日本人に関係した遺跡の報告と、ヴェトナム社会の現状と展望についての走り書きである。

一 ホイアンの遺跡

朱印船貿易時代に安南と呼ばれたヴェトナム中部の、古名をフエフォ（Huêphô）といった現在のホイアン（写真①）には、交易に従事した西村太郎右衛門と名乗る近江八幡出身の商人が居たといわれている。ヴェトナム訪問の直接の契機は、日頃から太郎右衛門の事績を近江商人の広域志向性の一つの表れとして考えていたので、ホイアンに残る日本人の遺跡を実見することにあつた。

太郎右衛門の事績について確かに分かっているのは、鎖国令後の正保四年（一六四七）に長崎に入港しようとして上陸を差し止められ、望郷の想いを込めて故郷の日牟礼八幡宮へ奉納したという貿易船の船絵馬があるのみである。同八幡宮に所蔵されている駒形に額装されたその大きさは、最大で縦八六センチ、横一メートルである（写真②）。額面には次の三三文字が墨書されている。^①

奉掛御寶前

安南國居住、西村太郎右衛門

正保四年丁亥三月吉日

菱川孫兵衛

近江八幡には、西村太郎右衛門と同じ時代に海外へ発展した商人として、近江八幡仲屋町に岡地勘兵衛家の口碑が残る。^②その家伝によれば岡地家の先祖は、暹羅（現、タイ国）へ通商して、暹羅染めという更紗の技法を習得したという。現に子孫は、代々暹羅屋勘兵衛を称し、暹羅染めという染布業を営んでいたことは事実である。

また、西村太郎右衛門と同時期にヴェトナムのホイアンで活動した商人としては、角屋七郎兵衛がいる。以下、神宮徴古館所蔵の角屋七郎兵衛文書と川島元治郎『朱印船貿易史』によって、七郎兵衛の事績を略述しておこう。

七郎兵衛は、徳川家康と深い関係にあった伊勢国渡会郡大湊で廻船業を営む角屋の出身であり、七郎次郎忠栄の三人の男児のうちの次男として慶長一五年（一六一〇）三月一七日に出生した。七郎兵衛は安南国交趾に渡航する貿易家であったが、寛永八年（一六三二）頃にフェフォに移住して朱印船に積載する同国の物産の仕入れにあたった。日本人の渡航や帰国を禁じた寛永一二年の鎖国令により、日本の兄弟との通信通交を絶たれた七郎兵衛は、安南国王

の一族である阮氏の娘を妻に迎え、順官と名付けた一男を挙げた。寛文年間に幕府が海外居住者の日本への通信を許可した結果、七郎兵衛が兄弟宛に出した書簡数通が現存している（写真③³）。書簡によって、物品の遣り取りがあり、それは中国船を通して行われたことが分かる。七郎兵衛は、フェフォに角屋の本姓である松本を冠した「松本寺」を建立し、梵鐘と扁額を故国に発注している（写真④、写真⑤）。七郎兵衛が同地で没したのは、寛文一二年（一六七二）正月九日。享年六三。

七郎兵衛の建立した「松本寺」の所在地を記した、文化四年（一八〇七）の角屋七郎兵衛文書の写本を含む『安南記』によれば、「松本寺」の位置と扁額は次のように説明されている（写真⑥⁴）。

川上也

西 唐人町

南 川

寺但し南向キ也

北は安南町

此寺ニかゝり申額ニ候

川下也

東 日本町

板ノ色ハ紺青ニテ惣地也、文字ハ金文字也、但し於き字
但し寺ハ南向御座候、うしろハ北也

寺の前にも川御座候

右によれば、寺の東側は日本町であり、それは川下にあたり、西側には唐人町がある。寺の北側は安南町であり、南には川があるという。さらに、寺は南向であり、うしろは北、寺の前にも川があるという。

この説明からすると、「松本寺」は現在の「日本橋」と称される橋そのものの位置になる（写真⑦）。「日本橋」に東側から通じているチャンフー通り（Tran Phu Street）は、昭和初年においても日本橋通り（Rue de Pont japonais）と呼ばれていたのである。⁽⁵⁾この通りの南側を西から東にトゥーボン川（Thu Bon River）が流れている。この川に、北から流れ込んでゐる小流に架かる屋根を葺いた長さ二〇メートルほどの橋が「日本橋」である。「日本橋」の内部には南面して小さな寺が内包されているが、現存の寺は改装されて中国風の寺そのものになっている。

さらに現地において七郎兵衛の事績を探ると、ホイアンの北方二〇キロの地点にある木山、火山、土山、金山、水山という五つの岩峰からなる五行山のうちの、水山の洞窟内に寺院があり、寺院建立の寄付者名簿が磨崖の碑に刻まれている。碑が建てられたのは一六四〇年と推定され、そのなかの一〇人の日本人名の一つに七郎兵衛の名前が次のように彫られているという。⁽⁶⁾

日本菅七郎兵衛阮氏慈号妙泰 供棧二十一夫買田

フエフォで日本町を構成していた日本人は、朱印船交易上において重要な地位を占めていた。すなわち、彼らは現地の雇人を農村に派遣して朱印船のもたらした銅銭による前貸し金融によって生糸を買付け、それを朱印船来航時に

積荷として受け渡す役割があった。⁽⁷⁾

名古屋の情妙寺には、その様子を描いた『茶屋新六交趾国貿易渡海図』が伝来している。その図会によれば、「日本町、両端三丁餘」と記され、船着場に立ち並ぶ三〇〇メートル余の建物列には二階屋も描かれている（写真⑧）。⁽⁸⁾

鎖国以後、日本人の居住者は減少し、フェフォ在住の平野屋谷村四郎兵衛から延宝四年（一六七六）に伊勢の角屋に送られた手紙によると、日本人の生存者はわずかに二人であると記されている。⁽⁹⁾ 当然、死亡した日本人の墓はホイアンとその郊外に建てられたと思われるのであるが、現存して所在が明白なのは二基のみである。

二月二七日に、そのなかの一基である、ホイアン郊外の谷弥次郎兵衛のものといわれている墓を訪れた。ホテルに仕立ててもらったワゴン車に乗り、ホテルマンが道案内に同行してくれた。場所は、チャウエ村（Tea Que Village）の水田のまっただ中である。この付近はヴェトナム戦争時に韓国軍が布陣し、暴虐な戦闘が行われ、村民は大きな被害を受けた地区である。

道路端に車を停めて水路に沿って四〇〇メートルほど農道を歩いた（写真⑨）。自転車で行って来た現地の農民らしき二人の中年男性が、墓所で手持ち無沙汰の恰好で待ち構えていた。埋葬者についての説明文が大理石に刻まれていた。その碑文には、次のような翻訳調の日本語が横書きに書かれていた。「一六四七年日本の貿易商人谷弥次郎兵衛ここに眠る。言い伝えによれば、彼は江戸幕府の外国貿易禁止令に従って日本に帰国することになったが、彼はホイアンの恋人に会いたくしてホイアンに戻ろうとして倒れた。この彼の墓は母国の方向北東一〇度を向いている。この遺跡は一七世紀にホイアンが商業港として繁栄していた当時、日本の貿易商人と当地の市民との関係が大変友好的であったことの証である。」

墓所の形は馬蹄形であり、広さは一〇坪ほどもある（写真⑩）。コンクリートで装飾されて広壮に見えるが、墓石自

体は横五〇センチ・縦八〇センチほどであり、碑面からは以下のような文様と文字が読み取れる(写真^⑪)。

日本 丁亥年

家紋 顕考 彌次郎兵衛谷公之墓

平戸 孟秋立

碑面は、風化がかなり進み、しかも所々にヴェトナム戦争による弾痕もあるので判読は難しくなっている。家紋は、現在では花卉が四枚に見えるが、昭和三年(一九二八)に現地を訪れた黒板勝美調査班によって撮影された写真によれば、花卉は五枚写っているから桔梗紋であろう。^⑩「顕考」というのは、亡き父という意味である。「彌次郎兵衛谷公」と記され、「公」の尊称が使用されている。「丁亥年」というのは正保四年(一六四七)に相当する。「孟秋立」というのは初秋に建てたという意味である。

以上の考証からすると、この墓は、谷弥次郎兵衛と呼ばれたホイアンにゆかりのある上層の日本人のものであり、谷氏の子供が正保四年の初秋に建てたことになる。

日本人の墓であることが明白なものとして、もう一基ある。今回の調査では実見できなかったが、それはホイアンの北方二キロのタンアン(Than-An)村にあるという。黒板調査班の撮った写真によれば、碑面には次のような紋様と漢字が記されている。中央上方には日輪の紋様 その下には「日本」という文字が右から左に刻まれている。さらにその下に縦書で「考文賢具足君墓」とある。右列には縦書に「己巳年仲秋吉立」、左列は摩滅し、わずかに「奉祀」という縦書の文字が読める。

「考文賢具足君墓」のなかの「考」という字は、「ちち」と読む場合があり、亡父の意味である。「文賢」は字あやなであろう。延宝年間（一六七三～一六八〇）にホイアン地方に在住していた四人の人名のなかに、道具商を意味する具足屋次兵衛の名前がある。⁽¹¹⁾ 確証はないが、あるいは、この人物の墓碑とも考えられる。なぜなら、墓の建立年は「己巳年仲秋吉立」とあるので、これは己巳年の年紀からみて元禄二年（一六八九）の八月と見るのが妥当であり、延宝年間に生きていた人物の墓としても矛盾はないからである。

次に、ホイアンの街並みについて述べてみよう。ホイアンの街の目ぼしい所は、歩いて回ることの出来る範囲に散在している。街路では、西端が日本橋に通じ、トゥーボン川に並行して走っているチャンフー通りがもつとも古く、いわばメインストリートの位置づけにある。チャンフー通りには、平屋と二階家の入り混じった建物が街路の両側に、透間なく、文字通り櫛比して立ち並んでいる（写真⁽¹²⁾）。それぞれの家の境目には、^{ウダチ} 税が上がつている家屋が目につく。

家屋の構造は、通りに面して母家があり奥には離家がある。⁽¹³⁾ 母家と離家の間は橋棟と中庭でつながれている。天井は木組みがまる出しであり、天井を葺いてある家は見かけなかった。全体の印象は、間口が狭く奥行きが深い京都の町屋の構造によく似た「鰻の寝床」形式の細長い建て方である。屋根は丸い瓦葺である。一年を通して日本の夏のような気候のため、瓦列の溝の部分には、大きな目の苔のような植物が生えている。

税、瓦葺の鰻の寝床の家並を見ると、日本の地方都市の観があり、どこか懐かしい雰囲気がある。ただ残念なことに、陽差しは強く、高温多湿のため、体力の消耗が激しかったので、街歩きは二日間とも午前中で切上げざるを得なかった。

二 ホーチミンの日系工場とヴェトナム社会の課題

二月二八日は、ホーチミン（旧名サイゴン）への移動日である。ガイドの車でダナン空港まで約四〇分の行程であった。ダナン空港のロビーは、節電のためか電光が少なく、昼なお薄暗い。明るくない空港ロビーは、ホーチミンのタンソンニャット国際空港 (Tansonnhat International Airport) でも同じであった。搭乗機の窓からは、積乱雲の下で鈍く光りながら黄昏ていくメコンデルタが見えた。

翌三月初日は、ホーチミンの市内見学である。九時半にガイドのマイさん (Mai) が、約束どおりにホテルへ迎えに来てくれた。マイさんは、二〇歳代半ばで、日本語を勉強しているという骨格の細い品のあるヴェトナム人女性である。市内での移動は、すべてメーター付のタクシーを使つてのガイドであった。

最初に戦争証跡博物館へ出かけた。ヴェトナム戦争を中心にした八つの展示室がある。爆弾・戦車・飛行機・銃器類など米軍の使用した兵器類の現物が展示されている。虐殺・枯葉剤・拷問などの残酷な写真も展示してあるが、米軍への直接的な怨恨や非難の表現は見当たらず、マネキン等によるどぎつい展示物もなく、事実をもつて語らせる方針が貫かれている。全体に抑制の利いた展示となっているので、嫌悪感はなく、無言のうちにヴェトナム民族の独立へ込めた粘り強い抵抗の戦を強く印象付けるものとなっている。

昼食後、市内中心部にあるフランス植民地時代の一八九一年に建てられた中央郵便局へ出かけた。内部は、中央に大きな高い天井のドームをもっているのので、ターミナル駅舎を想像させるいかにもヨーロッパ風の雰囲気を出している建物である。すぐ隣のノートルダム大聖堂と並んでフランス統治時代の名残を伝えている。

次に訪れたのは市内最大のベトナム市場 (Ben Thanh Market) である。市場の前の通りはロータリーになっていて、

サイゴン時代の市内中心部であったところである。建物は正方形の平屋であるが、正面の入り口には背の高い時計台があり、何よりの目印になっている。市場内の通路には、食品・衣料品・雑貨品などの小売店が文字通り螺旋して商品を通間なく並べ立て、店番の女性は来場者の腕や肩を臆することなく引つ張り、客引きに熱心である(写真⑬)。その、売らんかなの姿勢には、社会主義国であることなどの感覚を吹き飛ばしてしまうほどの熱気と欲望が剥き出しになっている。帰国後に、市場内の茶店で買った蓮茶を淹れてみたら、売り方からは想像できない本物の味がしたこともまた事実である。

三月二日は、ホーチミン郊外の工業団地に進出しているタカコ株式会社の現地工場見学の日である。京都の京田辺市に本社があり、アメリカのカンザス州とヴェトナムに工場を持つ油圧ポンプや自動車部品を製作するタカコ株式会社を一代で創業した社長の石崎義公いさきよみさんは、滋賀県信楽町の出身ということもあり、数年前から知遇を得ていた。

九時にホテルのロビーで通訳のマイさんと待ち合わせ、工場差し回しの車に乗って出発した。タカコ株式会社は、ホーチミン市の北一七キロに隣接するビンズン省(Binh Duong Province)のヴェトナム・シンガポール工業団地(VSIP:Vietnam Singapore Industrial Park)内に二つの工場を持っている。車は、バイク(オートバイ)の洪水の中を掻き分けるようにして第二工場に着いた(写真⑭)。出迎えてくれたのは、ジェネラル・ディレクターの端俊一はたしんいちさんである。まず、端さんから第一工場と第二工場に関するガイドランスを受け、両工場に関する以下のような要項を得た。

進出決定

二〇〇二年

タカコ ヴェトナム設立

二〇〇三年二月十四日

第一工場操業

二〇〇四年四月一七日

第二工場操業

二〇〇八年九月

総投資額

四三〇〇万米ドル

敷地面積 第一工場

二ヘクタール

第二工場

二・五ヘクタール

建物

第一工場

一万三五〇〇平方メートル

第二工場

九〇〇〇平方メートル

全従業員

日本人(管理・技術) 九人

ヴェトナム人

副社長 一人

スタッフ 一九四人

ワーカー 五一三人

渡されたキャップを被って、第一工場と第二工場の見学に出かけた。工場は、昨秋以来の世界不況の影響のため、半分からいゝ稼働状況であったが、各部門の作業場内には、「整理・整頓・清潔」などの標語が貼ってあり、キッチンと整頓されていた(写真^⑮)。工場内で行き交う工員は、礼儀正しく、笑顔で挨拶してくれ、好感が持てた。第一工場は、ISOの9001と14001を取得している。従業員食堂も完備していた。

昼食は、工業団地から至近距離にあるゴルフ場のクラブハウスで摂った。食後の座談のなかで、端さんから追加的な説明があった。工場の土地は、五〇年間の賃貸であり、五〇年間の賃料は第一工場が七〇万米ドル、第二工場は一一〇万米ドルであること。工業団地内の企業は約二五〇社あり、そのうち四分の一が日本企業であること。工場のヴェトナム人は、スタッフとワーカー(労働者)に分かれているが、スタッフは短大卒以上、ワーカーは高卒であり、

ヴェトナムの学歴社会を反映していること。ワーカーの年齢は平均二三・五歳であり、手取り月給は約八〇米ドルであること。従業員宿舎はなく、各人がバイクや自転車通勤していること。工場は三交代勤務の二四時間操業によって大量生産が可能であること。

帰国後に聞いた石崎さんの話によれば、タカコ株式会社のヴェトナム工場の従業員定着が良い理由として、次のような要因が挙げられていた。工業団地への進出が未だ一〇社位しかない段階での早期の進出であったために比較的良好の労働者を雇用できたこと。従業員福祉の一環として、工場内にレストランのような従業員食堂を設け、昼食を全額会社負担で提供していること。日本への九〇日間の研修制度があり、航空運賃と滞在費は会社側負担であり、すでに三〇〇人余の研修実績があること。能力のあるワーカーにはスタッフへの昇進の途を設けていること。これらのことがインセンティブとなつて、良質の労働力を確保でき、離職率も低いとのことであつた。

石崎さんの現地工場の経営方針は、近江商人の「三方よし」の経営理念に叶っている。売り手よし、買い手よし、世間よし、の「三方よし」において、売り手よしが最初に来るのは、先ず従業員の幸せな働く環境があつて、勤労意欲が湧き、買い手よしのための顧客満足というサービスや自発的な工夫がなされ、結果として世間よしにつながるようになるからである。

工場見学の後、ホテルへ戻つて休憩し、深夜発のヴェトナム航空九四〇便で三月三日早朝に関西国際空港に帰着した。フライトの七時間は、今回のヴェトナム紀行の感想を要約するには恰好の機会であつた。

日本企業がヴェトナムへ進出する背景として、一般に次のようなことが指摘されている。低賃金国であること。祝祭日が年間九日と少ないこと。民族紛争や宗教的な対立がないこと。人口構成が若いこと。ビンズン省の工業団地内の企業へは優遇税制があること。工業団地の電力供給・通信設備・上下水道設備・道路などの社会資本設備が充実し

ていること。対日感情が良好なこと。社会主義による一党独裁国ながら、安定した政権のドイモイ政策による経済発展政策が採られていること。

ヴェトナム戦争が終結して三五年が経過した。投資対象適合国として、外国企業の進出も著しい近年のヴェトナムであるが、交通網の整備や汚職の蔓延、国内経済などに課題も抱えている。

ヴェトナムの近年の経済成長率は七〜八%と、中国に匹敵する高さである。この勢いが持続されれば、国富も増大すると思われる。何より若者の姿が多く、その若者に活気があり、社会に活力を与えている。都市における現在のバイクの洪水は、少し以前であれば自転車（注）の洪水であつたろうし、いずれ自動車による交通渋滞の到来も予見される。

しかし、急速な経済発展は、社会に格差や歪みなどの跛行性をもたらすことを避けることは出来ない。あたかも湧き出してくる感のあるバイクの洪水、曲芸のような運転、平気で鳴らす警笛による喧騒。これらは、工業団地などの特区を除いた社会資本の遅れという交通事情がもたらしたものである。鉄道・電車・地下鉄・バス路線網や道路の整備が遅れているため、人々はそれぞれの用事を抱えて、勝手気ままに思い思いの方向へバイクを走らせることになるのであらう（写真⑩）。その結果として、旅行者による道路横断は、ストレスの多い極めて危険なものとなる。明治政府が社会資本の整備のために、明治三年（一八七〇）にお雇い外国人のエドワード・モレルの建言にしたがつて真つ先に工部省を設置したことは、明治政府の英断であつたことを改めて想起させた。

ヴェトナム共産党という一党独裁体制の下での経済建設は、迅速な政策決定という意味では有利であらうが、同時に役人の汚職と腐敗をもたらす結果にもなっている。ホイアンの二〇歳代前半の若い男性ガイドは、「役人や警察官の給料は低いが、彼らはお金持である。なぜなら賄賂を取るから」と自嘲気味に語ったものである。国家建設期のほとんどの途上国において、日常的にこの問題を抱えていることは悲劇であり、その克服は大きな課題である。帰国の

際に垣間見た、タンソンニャット国際空港の若い税関職員の稀に見る横柄な対応を思い出すにつけても、汚職についての途上国社会の宿痼の深刻さを察し得る。

次にヴェトナムの通貨流通についていえば、通常、ヴェトナムドンと米ドルの両方が通用する。旅行者の買物は、タクシーを除いてほとんど米ドルで可能である。実際、一週間の滞在中に使用したヴェトナムドンは、入国の際に空港で日本円一万円を両替した一八七万六〇〇ヴェトナムドンで十分であった。小さな土産店でも、旅行者に対する勘定は、旅行者側がヴェトナムドンでの支払いを申し出ない限り、基本的に米ドルで請求される。外国通貨の流通という国家主権に関わる問題に目をつぶってでも、国を挙げて外貨を稼ごうとしている様子が窺われる。

ホーチミンは目下、不動産バブルの最中である。端さんやガイドのマイさんによれば、居住のためでなく転売目的で取引されるマンション価格は、日本の価格とほとんど変わらないくらい騰貴しているということであった。たとえば、一DKマンションの価格は三〇万米ドルという。経済発展の負の局面を示す現象である。それにもかかわらず、豊かな生活を求めて、沸騰しているような観のあるヴェトナム社会には活力があり、ことに日本語を第一外国語とする学生が増えていることに見られる対日感情の良さは、特筆に価する。その意味で二〇〇九年、同志社大学経済学部がハノイのハノイ国民経済大学 (National Economics University, Hanoi) の都市・環境経済学部および法律学部と学術交流に関する協定を締結したことは、日越交流の一環としても時宜を得た草の根の企画であると感じた。

註

(1) 滋賀県経済協会『近江商人事績写真帖』下巻、一九三〇年、第一図。

(2) 川島元治郎『朱印船貿易史』内外出版株式会社、一九二二年、四三九・四四二頁。

- (3) 三重県伊勢市の神宮徴古館所蔵。
 - (4) 川島、前掲書、四六三・四六四頁。
 - (5) 黒板勝美先生生誕百年記念会編『黒板勝美先生遺文』吉川弘文館、一九七四年、一七八頁。
 - (6) 同書、一六七・一七一頁。
 - (7) 岩生成一『朱印船貿易史の研究』吉川弘文館、一九八五年、三四七頁。
 - (8) 前掲『黒板勝美先生遺文』は一六三頁で、「日本町、両輪三丁餘」と記しているが、「両輪」ではなく、「両端」である。誤記もしくは校正ミスであろう。
 - (9) 前掲『黒板勝美先生遺文』一七五頁。
 - (10) 同書、一八二頁。
 - (11) 同書、一七五頁。
 - (12) ホイアンの町家については、山田幸正「伝統的町家の建築類型に関する一考察」(『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol. 1、一九九四年)を参照。
- 本稿は、平成二〇年度私立大学等経常費補助金特別補助高度化推進特別経費大学院重点特別経費(研究科分)による研究成果の一部である。

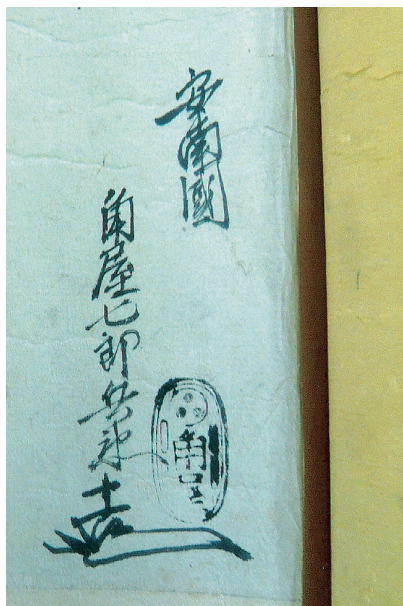
(すえなが くにとし・同志社大学経済学部)



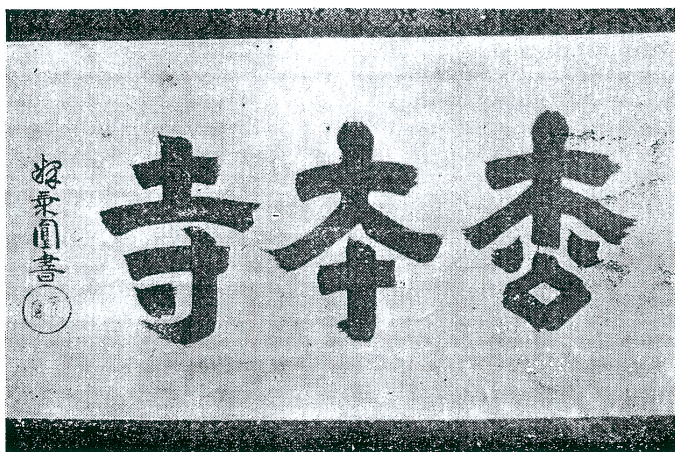
写真① 現在のホイアンのトゥーボン川河岸



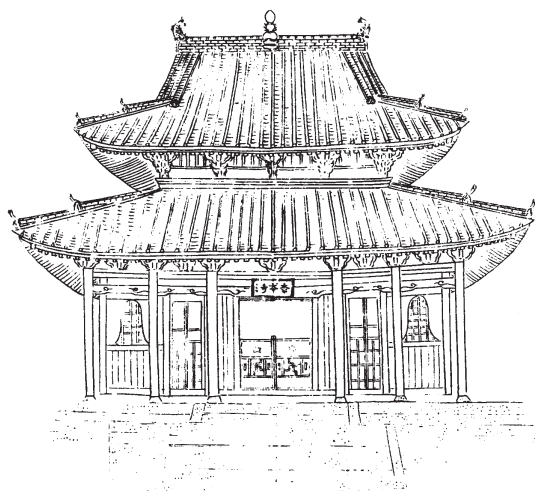
写真② 日牟礼八幡宮の西村太郎右衛門奉納の船絵馬
（平凡社別冊太陽『豪商百人』1976年）



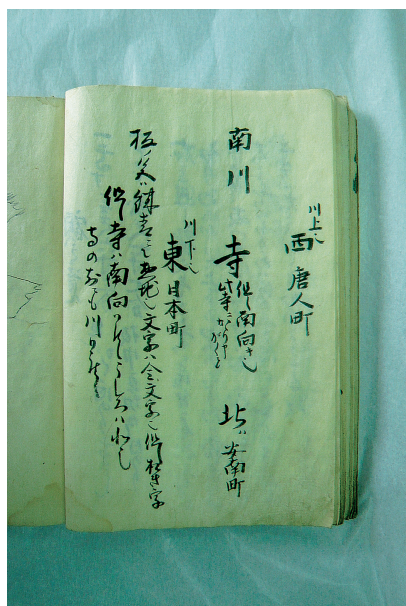
写真③ 角屋七郎兵衛の署名（神宮徴古館農業館所蔵、角屋七郎兵衛文書）



写真④ 「松本寺」の扁額（桜井祐吉『安南貿易家角屋七郎兵衛』1929年）



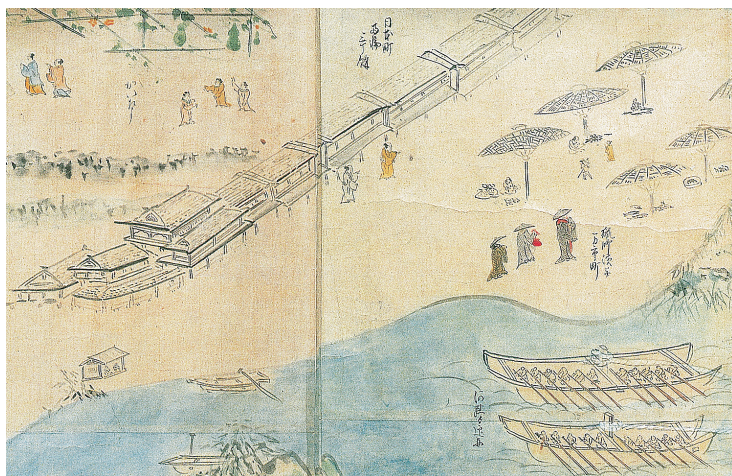
写真⑤ 「松本寺」の図（桜井祐吉『安南貿易家角屋七郎兵衛』1929年）



写真⑥ 「松本寺」の位置を示す史料（神宮徴古館農業館所蔵『安南記』）



写真⑦ ホイアンの「日本橋」



写真⑧ 『茶屋新六交趾国貿易渡海図』
(昭和女子大学国際文化研究所編『HOIAN』2000年)



写真⑨ 谷弥次郎兵衛の墓への途



写真⑩ 谷弥次郎兵衛の墓所全体



写真⑪ 谷弥次郎兵衛の墓碑銘



写真⑫ ホイアンの町並み



写真⑬ ベンタン市場



写真⑭ タカコ㈱の第一工場



写真⑮ タカコ㈱の工場内光景



写真⑯ ホーチミンの交通状況

Abstract

Kunitoshi SUYENAGA, *Travels in Vietnam*

Japanese merchants were engaged in international trade between Japan and Southeast Asia from the end of the 16th century to the beginning of the 17th century. These merchants were given permission to go abroad by the then Japanese governments. They also built Japan-towns in the Southeast Asian countries they visited including the Philippines, Thailand, Vietnam, etc.

This paper aims to (1) examine the remains of these merchants in Hoian, (2) report the current situation of the Japanese companies in the industrial park of Ho Chi Minh City, and (3) examine the present social issues facing Vietnam.